野菜生産は病害虫との戦い

普及センターだより

1、害虫防除の新しい試み

～虫をもって虫を制す～

私たちの食卓を彩る野菜には多くの病気や害虫がつきます。農家の皆さんは色々な方法でこれからの病害虫から野菜を守るために努力しています。現在の防除方法は農薬の散布が主流となっていますが、消費者からは減農薬栽培、無農薬栽培など農薬の使用を控えた農作物の要望が多く出されています。

これらの消費者ニーズに応えるため、また、生産者の農薬散布作業を楽にするため、農薬にかわる防除方法が検討されています。今回紹介するのは、最近注目を集めている「天敵」を用いた害虫の防除方法です。

2、天敵の種類

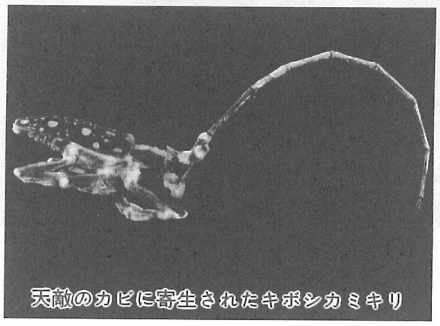
一口に「天敵」といっても色々なものがいます。害虫の体に卵を産み付けて、孵化した幼虫がその体内に寄生して生長し、ついには害虫を殺してしまうもの（寄生性天敵といいます）、害虫を食べてしまうもの（補食性天敵といいます）など様々です。

寄生性天敵として実用化されているものは主として小型の蜂やハエの仲間です。防除の対象となる害虫はコナジラミ、ハモグリバエ、アブラムシなどです。

補食性天敵として実用化されているものはハナカメムシ、カブリダニ（あまり聞き慣れない名前でしょう）、テントウムシ、クサカゲロウなどです。対象となる害虫はアブラムシ、ハダニ、スリップスです。

主として施設で栽培される野菜に大きな被害をもたらす害虫です。

害虫に感染する細菌やウイルスなどの微生物も天敵として利用されています。特にBT剤と呼ばれるある種類の細菌は微生物農薬として市販されており、アブラナ科の野菜を中心に利用されています。（細菌！と聞いて怖がらないでください。人間には感染しませんから。）



天敵のカビに寄生されたキボシカミキリ

3、天敵農薬の現状

「天敵」を用いた害虫の防除は日本では普及が始まったばかりですが、すでにヨーロッパではトマト、キュウリ、イチゴ、ナスなどの施設栽培を中心に実用化されており、天敵を大量生産して販売している会社もあります。現在日本では、これらの会社から輸入された天敵が利用されていますが、国内産の天敵を実用化するための研究も進められています。

4、天敵利用の実際

～イチゴ畑でつかまえて～

天敵利用技術は輸入天敵、在来天敵いずれを用いるにしてもまだ100％確立されているわけではありません。日本の気候風土、農作物の水準を考慮して、また、地域の実情にあってはじめて実用化されるのです。

わが山武地域では現在イチゴ栽培でオンシツツヤコバチ、チリカブリダニなどの天敵を用いた減農薬栽培に取り組んでいます。イチゴ狩りに行く機会があったら、ちょっと葉をめくってみてください。そこでは色々な天敵が害虫退治に活躍する姿が見られることでしょう。

野菜科　福田　寛

※問い合せは、普及センター松尾駐在（☎86-4121～2）へ。

1月10日は「110番の日」

～安心を　つなぐかけ橋　110番～

1月10日は「110番の日」です。110番は、皆さんと警察を結ぶきずなとして広く定着しています。平成7年中の通報件数は約571万件にも上り、事件事故の早期解決に大変役立っています。

110番をかける際には、「いつ、どこで、何があったのか」をはっきり落ち着いて話し、警察官が一刻でも早く到着できるよう現場の目標となる建物なども伝えましょう。なお、110番は緊急通報の専用電話ですので、運転免許に関する問い合せや相談ごと等急ぎでない用件は、警察相談専用ダイヤル「＃９１１０」（プッシュ回線のみ使用できます。＃〔シャープ〕ボタンに続いて番号を押してください。）を利用してください。

～相談は　真心ダイヤル＃９１１０～